

令和元年6月18日現在

機関番号：34313

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02994

研究課題名(和文) 中規模古墳の動態からみた大和政権の地域支配

研究課題名(英文) Regional government by Yamato dynasty through the analyses of the middle-class tombs

研究代表者

高橋 克壽 (TAKAHASHI, Katsuhisa)

花園大学・文学部・教授

研究者番号：50226825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：最大級の地域首長墓ばかりを対象にした古墳時代研究を是正するために、地域首長墓に次ぐランクの古墳の動態に注目し、大和政権による地域支配の実現過程の復元を試みた。対象としたのは、福井県若狭地方の5世紀の古墳で、発掘調査や測量調査を実施し、それらの埴輪や埋葬施設の特色を明らかにした。

その結果、大和政権が若狭の地域首長墓の勢力を削いで、配下の有力者を取り込みながら国家形成を進めた姿は認められなかった。むしろ、6世紀にかけて配下の有力者たちが首長とともに大和政権の関与を排除していく動きが読み取れた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀に入って、日本の古墳時代研究は3世紀後半以後を、「前方後円墳体制」等と称して、律令国家に先立つ初期国家段階であると喧伝されるようになった。それにより、我が国の国家形成は以前の歴史学の理解よりかなり早い段階から用意され、古墳時代を通して完成に近づいていくという歴史観が広まりつつある。

この考え方は、大和政権中枢の大王墓と各地の古墳との相関関係を探る首長系譜研究がもとになっているため、中下位の古墳は顧みられることが少ない。そのため、6世紀に復活する各地での前方後円墳の姿に、大和政権の直接支配がそのクラスにまで及んだとする理解まで表明されてきたが、若狭地域ではそれを否定する結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：It is popular to study Kofun period with special regard to the biggest tomb,

that is the local chief's tomb in each region. To avoid the prejudice of this approach, I researched the middle-class tombs in comparison with the biggest ones. This study has been done in the Wakasa district, that is western Fukui prefecture, during the 5th century AD. Consequently, it could not be confirmed that the Yamato dynasty had ruled local politic government by weakening the chief's power and leveraging the local officials. On the contrary, the influence of the Yamato dynasty diminished by the 6th century.

研究分野：考古学

キーワード：大和政権 中規模古墳 若狭 地域首長 前方後円墳 埴輪

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の古墳時代に対する考古学的研究は、今日各地域の大型前方後円墳を首長墓とみなし、それぞれの系譜関係をそれぞれの地域で確かめることを基礎としている。そして、全国的な広い視野から眺めた場合に、地域を越えて認められる変化や盛衰が、ヤマトの大王をとりまく政治連合(大和政権)の動きと連動しているように見えることを根拠に、「前方後円墳体制」(都出 1993)あるいは「前方後円墳国家」(広瀬 2003)といった時代のとらえ方が提唱され、支持を集めている。

(2) これらの考えは、弥生時代以来成長をとげてきた各地域の首長(豪族)を頂点とする地域支配を前提とし、もともとその首長を全国的な一定の序列に組み込むことで大和政権が間接的に地域支配しているとするもので、首長墓の被葬者をのちの郡司層と同様な存在として見ていることになる。

そして、時の経過とともに、地域首長配下の有力者たちに対して、首長を通さず直接権限を及ぼしていくことで、古墳時代の伝統的地域支配を打破し、中央集権的な政治体制に近づいていったとする変化も予測した理解であった。しかし、はたして、6世紀に各地で復活する各地の前方後円墳被葬者に対して、そういう大和政権の勢力伸長があったかどうかははまだ検証されてはいないのである。

このように、近年の古墳研究は首長墓を頂点とするピラミッド形階層構造をモデルとする研究(和田 2018)に偏りすぎていて、新たな研究視点やモデルが模索されている。

2. 研究の目的

(1) 地域首長墓偏重の古墳時代研究を是正するためには、地域首長の配下に位置づけられる地域の中規模古墳の実態を、首長墓と対比的に解明しなくてはならない。そして、その対比を通時的にとらえることによって、地域での階層構造の特質や中規模古墳に葬られた有力者がどのように成長ないし変化していくのかをトレースすることができる。

(2) 本研究においては、歴代の地域首長墓がその特色とともに明確に追えること、そして、下位の古墳についてもそれぞれの首長墓に対応する時期に見出すことができ、それらについても情報が揃っていることが肝要である。

(3) 上記の条件を満たす場所としては、福井県西部の若狭地方が最適である。この地域は、畿内を含めて律令制の各国と比べるとときわめて狭い一国であるが、平野部も限られ地域的な完結性が高い。いっぽう、日本海を利用した海上交通や内陸への入口にあたる利便性などから、さまざまな地域からの影響を受けやすい土地でもあり、かつ、大和政権にとって、もっとも近い日本海の港湾を擁する重要地点でもある。そうした、海外を含め周辺地域との関係、そして、大和政権の影響のあり方をそれぞれの時代で明らかにすることを第一の目的とした。

(4) そうして明らかになった首長墓、非首長墓の動静を総合して、「前方後円墳体制」理解の問題点や新たな研究の必要性を提示することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 若狭地方において、中規模古墳の実態は他地域に比べるとかなり明らかになってきてはいるが、それでもけして十分ではない。いくつか情報が不足している時期があり、そこを補う調査が必要である。

まず、地域最初の大首長墓である上ノ塚古墳の築かれた5世紀前葉の中規模墳としては藤井岡古墳が葺石埴輪を備えた該当古墳であるため、発掘調査によって埴輪や埋葬施設の情報をつかむことを目指した。なお、隣接する藤井岡三味古墳も、家形埴輪が樹立した状態で遺存していたために、可能な限り情報の収集を試みた。

5世紀中頃の古墳としては、5世紀の若狭の首長墓が密集する脇袋地区とは離れた丘陵上に1基だけ造営された城山古墳を首長墓と認める意見が強かったが、それに匹敵する後円部直径を誇る脇袋丸山塚古墳を調査対象に選んだ。本墳はかつてのトレンチ調査により、若狭唯一の大型の帆立貝式古墳であり、前方部には特殊な遺構が存在することがわかっていた。本研究ではその解明も目指した。これは、後続する時期の中規模古墳である向山1号墳と対比させる意味もあった。向山1号墳は本州最古の横穴式石室や武器武具埋納遺構をそなえ、金製耳飾などの舶載品をはじめとする大量の副葬品や東海系の埴輪など個性豊かな内容をあわせもっている古墳である(若狭町 2015)。

これに、さらに脇袋地区の5世紀後半の首長墓西塚古墳や中塚古墳との関係で、5世紀末の糠塚古墳と呼ぶ前方後円墳も検討することとした。これらについては、基本的に資料の充実している埴輪からアプローチした。

こうして、5世紀のほぼ全期間、主として埴輪を用いながら、その他の要素と併せ、中規模首長墓の動態を首長墓と対比させて明らかにした。

4. 研究成果

(1) はじめに発掘調査を行った藤井岡古墳は、直径約26mの円墳で、墳頂周囲には壺形埴輪や円筒埴輪がめぐらされ、形象埴輪に、家形埴輪や甲冑形埴輪が用いられていたことがわかった。なかでも、甲冑形埴輪は、きわめて精巧に鉄製短甲を模した製品で畿内王陵周辺でしか作られていないものである(図)。それに比べると、墳丘には非畿内的な壺形埴輪が廻らされていたことは予想外であった。これには、東日本との有力者とのつながりが読み取れ、大和政権は首長墓である上ノ塚古墳の首長を介さずとも、藤井岡古墳の被葬者のもつ交渉力を利用し、精巧な形象埴輪を与えない。

なお、墳頂部で実施した物理探査では、藤井岡古墳の埋葬施設は、東西方向に設けられた木棺を主体とするものであることが予測された。また、大陸的な埋葬施設は導入されていないと判断できる。

藤井岡古墳の段階で最上位の上ノ塚古墳には、似たような地域色はなく、きわめて畿内的である。このことは、本来の在来勢力は藤井岡古墳の被葬者のほうで、いわば派遣將軍のような外部付与型で上ノ塚古墳が出現した可能性を考えさせる。

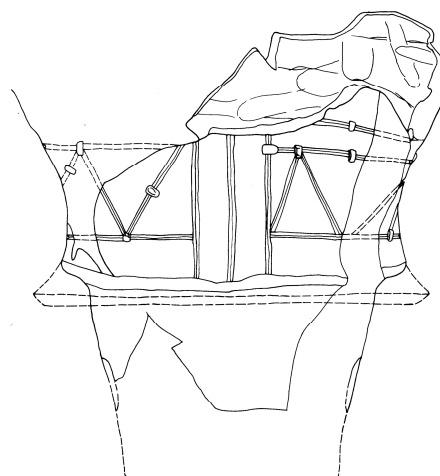


図 藤井岡古墳甲冑形埴輪

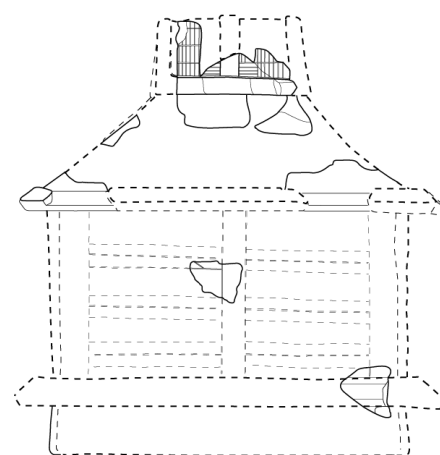


図 藤井岡三味古墳家形埴輪

(2) 続いて解明を試みたのが藤井岡三味古墳である。土地所有者の意向で、発掘調査はできなかったが、地形測量及び墳頂西端に原位置を留める家形埴輪の散乱した接合資料を回収した。それらの採集資料を検討したところ、すべて同一個体の破片であることが確かめられ、各部の情報がそろっていたので、翌々年の2018年度に復元した(図)。本資料も藤井岡古墳の甲冑形埴輪同様、畿内王陵系に合致するもので、工人レベルでの直接の大和政権の関与を示すものと言える。

(3) 5世紀中頃の中規模古墳として、脇袋にある丸山塚古墳の発掘調査を実施した。これは、既往の予備的発掘調査を受けた本格的な調査となった。まず、全長約52mの規模を誇る二段築成の帆立貝式古墳で、後円部墳丘は直径約42mを測り、墳頂とテラスに埴輪を廻らすことが知られた(図)。この墳頂には、全国的にも類を見ない山形の頂部をもつ鱗付円筒の形をした柵形埴輪と、畿内中枢の古市古墳群でのみみつかっている平面形が長方形になる組み合わせ式の囿形埴輪が出土し、とくに注目される。

これらのセットは、脇袋丸山塚古墳が5世紀第 四半期頃に大和政権中枢の影響を受けて、北陸で唯一古墳に採用したものと判断できる。相伴している円筒埴輪も当該期の王陵系の特色をよく保持している。

しかるに、事前の調査で前方部にその存在が予測されていた特殊遺構は、帆立貝式古墳の施設としてはきわめて珍しいものであることがわかった。それは、古墳の墳丘を、切り土や盛り土で造っていく以前に構築したもので、地山を掘り下げて墓壙とし、中に遺骸などを納めたあと木蓋で封じ粘土

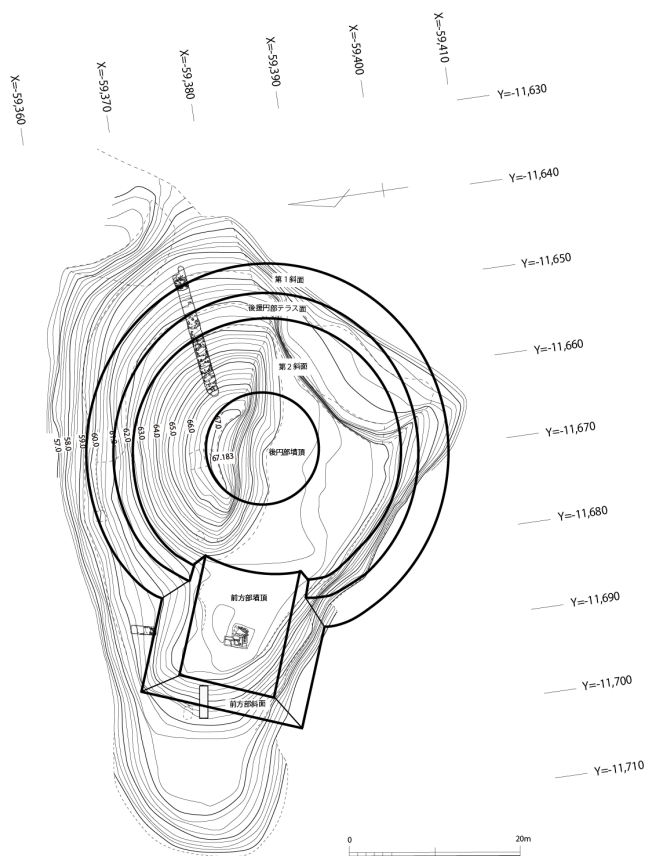


図 脇袋丸山塚古墳墳丘復元図

の目張りをする。その後、前方部を盛り土で築きながら、途中で土層の境に粘土を敷いて鉄鏝を塗り込める儀礼をおこなうというものである。

このような施設は、王陵周辺では見られない。強いて類例をさがすと、岡山県赤磐市正崎2号墳の埋葬施設があげられるくらいで(山陽町 2004)、むしろ、半島に古くから伝わる埋葬形式との関連が強く窺われる(図)。

その点、今回埴輪からあらためて先後関係が判明した向山1号墳(若狭町 2015)が、初期の横穴式石室を採用していることや半島製の金製耳飾を出土していることとあわせ、対外交渉を得意とする本地域の特性を見せ付けてくれる遺構と評価することができる。

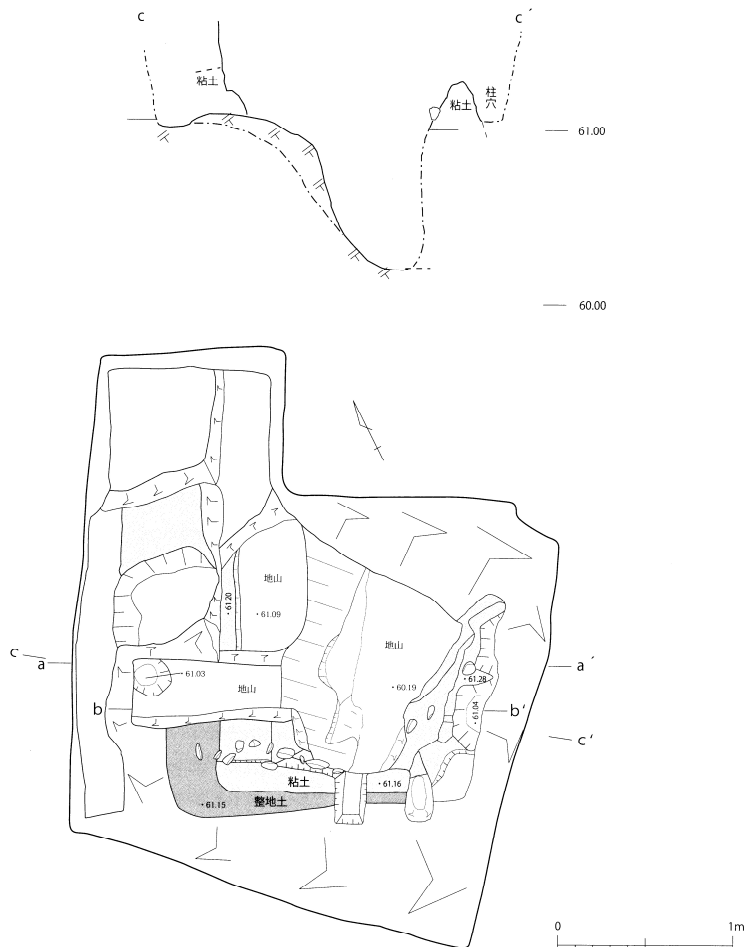


図 脇袋丸山塚古墳前方部特殊遺構

(4) 藤井岡古墳で出土した甲冑形埴輪と藤井岡三味古墳の家形埴輪をそれぞれ検討した。甲冑形埴輪は、北陸・若狭で最古のものであり、かつ、王権

関与がもっとも強く窺われるものであった。甲冑形埴輪は北陸ではその後5世紀末まで好んで古墳に並べられていたことから、その登場のインパクトが強かったことを想像させる。

一方の家形埴輪は、寄棟造家の形式に属するもので、その後の北陸地方で造られた家形埴輪も寄棟造家をもっぱら選択して作っている。このことは、東日本全体に共通する事象でもあり、実際の家屋の形式を反映している可能性が高い(高橋 2018)。

このように形象埴輪の選択性においても若狭の地域の独自性がよく現れていることが確かめられた。

(5) 円筒埴輪に関しては、これまで判明している5世紀の若狭の首長墓の円筒埴輪との関係が明らかにできた。藤井岡古墳の壺形埴輪・円筒埴輪は、上記甲冑形埴輪の特徴からも、上ノ塚古墳に遡る可能性も指摘できる。また、脇袋丸山塚古墳の円筒埴輪も上記形象埴輪の特徴からしても、これまで首長墓とされてきた城山古墳に併行ないし、先行しうるものである。その場合、後円部径の大きさや脇袋での立地からして、首長墓に準ずる扱いができる可能性が指摘できる。このあと、大陸的色彩の強い著名な向山1号墳が少し離れたところに築かれる。ここでは、東海でも尾張地方の古墳を飾る円筒埴輪とそっくりな須恵質の円筒埴輪が樹立された。

このように、5世紀中頃までは中規模古墳の埴輪はいずれも独特でそれぞれの関わりの中で埴輪を用意していたことがはっきりした。地域首長墓と同様な内容であるとか、技術の伝承とかが読み取れないのである。

ところが、5世紀後半以後になると、首長墓の西塚古墳の円筒埴輪に見られた技術的特徴や形態が、次代の中塚古墳や同時期中規模古墳である糠塚古墳にも受け継がれていく様子が看取された。ここにきて埴輪の生産体制が大きく変わったことがわかった(図)。

(6) 本研究は、もともと地域首長の配下にいたと考えられる各地の有力者の中規模古墳に研究の目を向けることで、大和政権の支配が徐々に浸透していく姿が描ける可能性を想定して取り組んだものであった。ところが、実際は、首長墓が比較的忠実に王陵を模して造営されているのに対して、中規模古墳はむしろ地域首長墓よりもずっと個性や生前の活動を反映した内容を保持しており、必ずしも首長を介した大和政権との結びつきに縛られてはいないことが明らかになった。若狭ではとくに、それが地域間交渉の実態について指摘できよう。

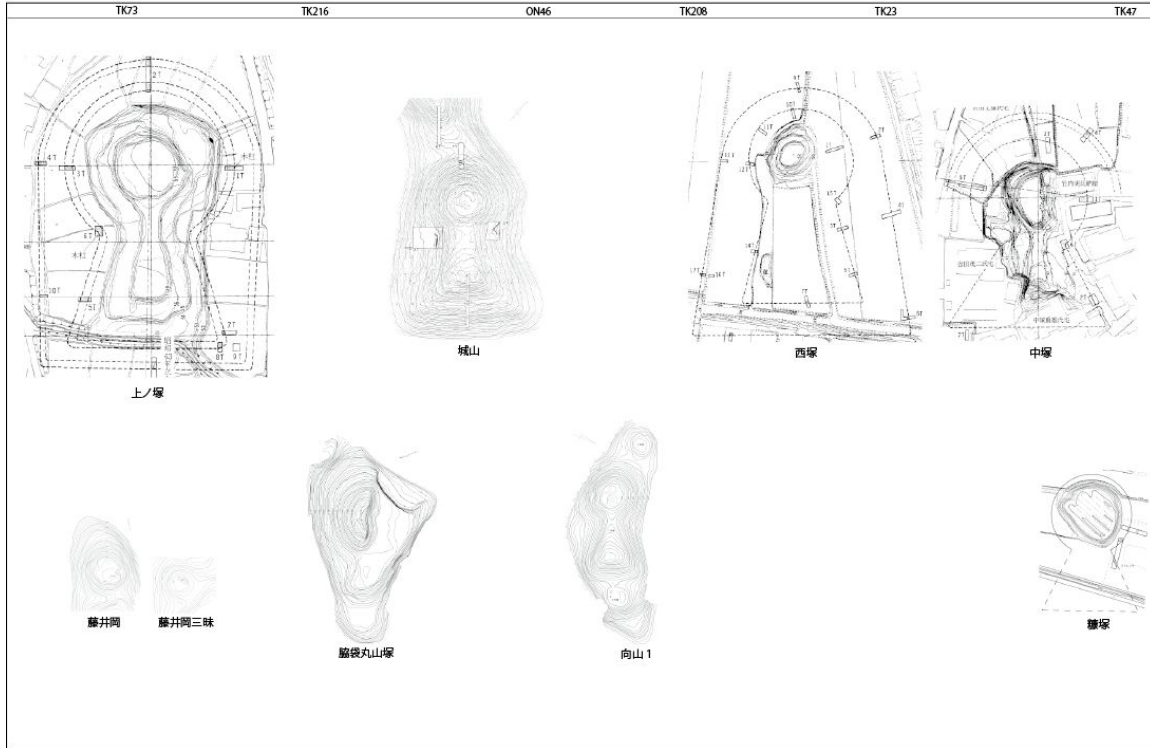


図 若狭地方の首長墓と中規模古墳の対応関係

そして、実務担当の中規模古墳被葬者に遅れるようにして、半島的な埋葬施設をそなえた西塚古墳以後、どうやら地域首長墓にも畿内にはない独自色が強まり、後期の十善の森古墳と呼ぶ完全に畿内的な様相を押しよけた前方後円墳の登場に至る。ここに来て、若狭の首長墓から、中小規模古墳に至るまで、階層的な体制ができあがったと言わなければならない。

このように見ると、「前方後円墳体制」というのは、地域によっては、必ずしも首長を頂点とするピラミッド構造的な政治秩序を実現してはならず、首長の権威も相対的なものであったと言わざるを得ない。後期における前方後円墳の復活というのも、王朝交替を契機とした中期の首長に抑圧された地域勢力の復権（福永 2011）というより、地域勢力内での実力者の成長のためのものであり、そこに王権からの保証という側面をあまり強く読み込むことはできないと結論づけられる。

< 引用文献 >

- 山陽町教育委員会、正崎 2 号墳、山陽町文化財調査報告書第 1 集、2004、1 - 116
- 高橋克壽、寄棟造家形墳輪の研究、古代文化、69 - 2、2017、65 - 86
- 都出比呂志、前方後円墳体制と民族形成、待兼山論叢、史学篇 27、1993、1 - 26
- 広瀬和雄、前方後円墳国家、角川選書、2003、1 - 260
- 福永伸哉、古墳時代政権交替論の考古学的再検討、平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書、2011、1 - 97
- 和田晴吾、古墳時代の王権と集団関係、吉川弘文館、2018、1 - 404、
- 若狭町、若狭向山 1 号墳、1 - 269、2015

5 . 主な発表論文等

〔 図書 〕 (計 2 件)

- 高橋克壽他、中規模古墳の動態からみた大和政権の地域支配、平成 27～30 年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) 研究成果報告書、2019、1 - 81
- 高橋克壽他、百舌鳥最後の大王墓を探る - ここまでわかるニサンザイ古墳 -、堺市文化財講演会録、12、2019、1 - 125

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：高橋 克壽
 ローマ字氏名：(TAKAHASHI , katsuhisa)
 所属研究機関名：花園大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 50226825